

資料・統計

2001年産科分娩統計

Annual Report of Deliveries in 2001

西野 幸治 網倉 貴之 西川 伸道 塚田 清二
 笹川 基本 間 滋 児玉 省二 高橋 威

Koji NISHINO, Takayuki AMIKURA, Nobumichi NISHIKAWA,
 Seiji TSUKADA, Motoi SASAGAWA, Shigeru HONMA,
 Shoji KODAMA and Takesi TAKAHASHI

はじめに

2001年1月～12月に当科で取り扱った分娩について、その概要を報告する。

分娩件数

表1に過去10年間に当科で取り扱った分娩件数を示す。2001年は139件で前年度より18件(11.5%)減少した。

表1 年次分娩件数

年	分娩件数(件)
1992	418
1993	358
1994	299
1995	277
1996	305
1997	282
1998	326
1999	196
2000	157
2001	139

産婦の年齢分布を表2に示す。年齢は19～41歳で、平均30.3歳であった。初産婦は66例で全体の47.5%、35歳以上の高齢初産婦は5例、全体の3.6%であり、昨年(7例、4.4%)に比べ減少した。

表2 産婦の年齢分布

年齢	初産	経産
～19	1	0
20～24	7	5
25～29	36	13
30～34	17	32
35～39	5	21
40～	0	2
計	66	73

分娩様式

表3に分娩様式を示す。正常分娩は108例(77.8%)で、骨盤位分娩1例(0.7%)、吸引分娩7例(5.0%)、帝王切開分娩23例(16.5%)であった。また、高齢経産婦23例中反復帝王切開2例を除いては全例正常経産婦であったのに対し、高齢初産婦では5例中2例が帝王切開分娩、1例が吸引分娩と5分の3が異常分娩であった。

帝王切開の適応を表4に示す。帝王切開例23例のうち選択的帝王切開が9例、緊急帝王切開が14例に行われた。また、今年度は双胎妊娠が2例あり、いずれも帝王切開分娩となっている。

表3 分娩様式

正常分娩	108(77.8%)
骨盤位分娩	1(0.7%)
吸引分娩	7(5.0%)
帝王切開	23(16.5%)

表4 帝王切開の適応

前回帝王切開	4
胎児仮死	3
児頭骨盤不均衡	3
分娩進行停止	3
骨盤位	2
前置胎盤	2
双胎	2
妊娠中毒症	1
子宮筋腫	1
卵巣嚢腫	1

妊娠合併症

妊娠合併症を表5に示す。妊娠中の合併症として妊娠中毒症2例、前置胎盤2例を認め、また合併症妊娠は子宮筋腫2例、甲状腺機能亢進症2例、子宮頸部上皮内腫瘍2例、卵巣嚢腫1例、特発性血小板減少性紫斑病(ITP)1例、ダウン症候群1例であった。また、分娩時の合併症として弛緩出血を1例に認めた。

表5 妊娠合併症

妊娠中毒症	2
前置胎盤	2
子宮筋腫	2
甲状腺機能亢進症	2
子宮頸部上皮内腫瘍	2
卵巣嚢腫	1
ITP	1
ダウン症候群	1
弛緩出血	1

在胎週数・出生体重・性別

在胎週数を表6に、出生体重を表7に示す。正期産(37週0日~41週6日)は127例(91.4%)であり、早産3例(2.2%)、過期産8例(5.8%)であった。また原因不明の30週での子宮内胎児死亡が1例あった。

また、2500g未満の低出生体重児は9例(6.5%)、4000g以上の巨大児は5例(3.6%)であった。性別は男児70例、女児71例であった。

表6 在胎週数

37週未満	4
37週	9
38週	19
39週	37
40週	40
41週	22
42週以上	8

表7 出生体重

2500g 未満	9
2500~2999g	33
3000~3499g	63
3500~3599g	31
4000g 以上	5

アプガースコア

アプガースコアを表8に示す。

全出生児の96.4%が8点以上であった。7点の児2例はいずれも5分後には9点となっているが、5点の児2例中1例は他院のNICUへ新生児搬送、1例は巨大児であり腕神経叢麻痺が残った。0点は前述の30週子宮内胎児死亡の症例である。

表8 アプガースコア

10	0
9	128
8	8
7	2
6	0
5	2
4	0
3	0
2	0
1	0
0	1